

監修 大佛次郎 川口松太郎 木村毅

講談社

大衆文学大系

11

長谷川伸
土師清二

大衆文学大系11 長谷川伸 土師清二集

昭和四十七年二月二十日 第一刷

著者 長谷川伸 土師清二

装幀者 田中一光

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二―十二―二十一 郵便番号一―二二
電話東京〇三三九四五―一―二一 大代表 振替東京三九三〇

印刷所 信毎書籍印刷株式会社

製本所 大製株式会社

定価 二八〇〇円

©財団法人新鷹会 土師清二 一九七二年
落丁本・乱丁本はおとりかえいたしません

目次

長谷川伸集

二十九年目の仇撃	五
上杉太平記	三五
源太時雨	三一
幕末美少年録	二六
瞼の母	三三
沓掛時次郎	四七
関の弥太ッペ	四三

一本刀土俵入

四

土師清二集

砂絵呪縛

四

水野十郎左衛門

三

解説

五

解題

五

年譜

六

長谷川伸集

二十九年月の仇撃

清水谷屋敷

大阪天満の天満橋の欄干に倚りかゝり、きょうも又、川の水を眺めて、長いことじっとして居る年二十二三の浪人がある。

きょうで七八日というものの、この浪人は八つ半か七つには——今の午後三時か四時には、橋の上へきて、始めのうちは東を眺めたり西を眺めたり、だれでもするらしいことをしていた。やがてがっくり頭を垂れ、橋台の下の逝く水の色をじっと眺めるのが、毎日おなじ繰返しだった。長いときは半刻、今の一時間、短いときでも今の三十分間はいた。

浪人は赤堀源五右衛門といって、五尺五寸余りの身長があり、体格は見事に発達をしており、血色はすこし悪いが好男子

である。主取りを望んで、江州大津からここ大阪へ出てきて、天満の貸間寺に寝起きし、既に半年余りになるが、これという奉公口にあり付けず、一二月前から目にみえて苛々していたのが、このごろでは一入ひどくなっていた。

天満橋から東にむかってみると、右に莊嚴を極めた大阪城がある、その左は大和川と淀川の出合いで、細く突出たデルタの上の街を割いて鯉川が東にむかっている。デルタの上の街の一つは網島である。網島は近松門左衛門六十九歳の作「天の網島」に「手に百八の玉の緒を涙の玉に繰まぜて、南無あみ島の大長寺、藪の外面のいさゝ川、流れみなざる樋の上を最後どころと着きにける」とある。紀の国屋小春、紙屋治兵衛の心中場所である。それはこの時より約五十年後のことで、赤堀源五右衛門が悶々としているこの時は延宝元年、徳川將軍は四代目、徳川家綱の晩年、近松門左衛門にすると、処女作をまだ出していない、二十二歳の頃に相当する。

源五右衛門はその日、物憂げに橋の上から南を見た。そこは京橋二丁目で、突当りに東奉行所と代官所がある。右にすこし行くと谷町の通りが南へのびている。源五右衛門はそれにも、見るでもない眼を向けて、深く頸を襟に埋めた。彼は殺そうとしている相手が、手に余るので連日、きょうこそは／＼で日を送っていたのである。

源五右衛門は北に向いた。北は天満である。天満宮の峰のよなな屋根がみえる。

その日、源五右衛門は血色をます／＼悪くして、天満の貸間寺へ引返した。

翌日は十月十八日、延宝元年のである。霜が降りた朝だった。

源五右衛門は槍術を教えていた。門人は僅だった。その朝は

かりでなくここ二三日というものの朝飯前の稽古に通ってくる門人がひとりもいなかった。けさも又だれ一人やって来なかった。

寺男が、といつても、賭もやっている五十近い率直な男である。

「どうなされましたかいな、赤堀の旦那はん」

「じいさんか。寒いのに」

「お寒いことで。けさも来まへんな」

「門人か。不熱心な奴原だ」

「旦那はん、悪いこと申しまへん。門弟衆をふやそうには、お稽古に色気もたさんとな」

「稽古に色気をもたせとは」

「お手や、わらかにやらんと可けまへん」

「馬鹿ッ」

「げッ」

「うぬらの知ったことか、武芸は武士の表芸だ、手ぬるくして上達するか」

がみ／＼と寺男を叱りとばした源五右衛門の顔が、鬼みたいになった。

その日の午後、源五右衛門は天満橋を素通りした。いよ／＼彼はきょうこそはという気である。

源五右衛門は谷町筋を南に、まっ直ぐに行った。きのうと違い、けさとも又違つて快調だった。

すずや町の四ツ角までくると、さつと顔色が悪くなったがすぐ元に戻った。そこは約五千坪ある大阪城代の下屋敷だった。

源五右衛門はその前を通り越し、東に添つて曲りかけ、すぐそこにある京橋口定番屋敷が今更の如く眼についたので引返しただけであつた。そのときの京橋口定番は米津出羽守（田盛・武

州久喜・一万五千石）だった。

源五右衛門は南谷町から玉木町へ出て、左に曲つた。彼が心ひそかに狙っている人は、清水谷の城代家中屋敷にいた。

清水谷屋敷は真田山に近い、寺々が夥しくある平野へも遠く

日が薄れてきたので、滅切り風が冷たくなった。遙かに四貫島野田のあたりだらう、傾いた日に雲が赤く染まりかかりかけている。

そのころ、源五右衛門はますます快調になっていた。

彼がつか／＼はいつて行つたのは、城代持の一番所勤務の石井宇右衛門の屋敷である。屋根のある門があつて、門の左右の袖に、人の二三人はあがつて、乱入者を、一応、防げるだけの足場がある。門から玄關まで二三十歩程の両側が塀になつていて、乱入ものが門を破つてはいつて来ても、自由に働けないだけの狭さにしてある。そうして置いて塀の内から討つて出られるように隠し木戸が設けられてある。源五右衛門はそういう事は知つていた。そのみならず、徳川幕府の武威が、もっとも伸張された寛永年間から、三十余年の今では、それらの要意が、必要でないという事も知つていた。

源五右衛門は台所へ廻つた。きのうは来なかったが、その前日、彼は何気なくきて何気なく帰つた。その前の日も／＼、江州から出てきて以来きのうまで、連日くることもあり、二三日置き又は四五日置きにくる事もあるので、石井宇右衛門の召使のものの全部と懇意だった。

台所の外に若党の小倉伝兵衛が片付けものをしていて、台所の内には女中が夕食の残り物を煮返す、芳しい匂いがぶん／＼していた。

源五右衛門は快調に、

「伝兵衛。宇右衛門殿おいでか」

と、聞いてから顔色がちりりと変ったが、すぐ笑顔をつくった。誰もそれに気がつかなかった。

「お出ましに御座ります」

「お留守か」

と、ほっとした顔を源五右衛門がした。伝兵衛が再び、

「お下屋敷の斎藤様へ、仁左衛門を供に召され、先刻、お出ましにご座ります」

「そうか。斎藤殿とはウマが合うから、お帰りは遅かろう」

独り言のようにいつて伝兵衛の顔をちらと見た。伝兵衛は何んとも気がつかず、

「左様でもござりますまいと存じあげます」

「そうかな、では、茶の間で遊んで参ろうか、そのうちお帰りになったら、お目にかかろう。ほう、何を煮ている」

女中の肩越しに鍋の中を覗いた。女中は笑っているだけで、何んともいわなかった。

若党の伝兵衛は茶の間へ一度も顔を出さず、長屋へ引下って内職の手細工にかかった。源五右衛門の浮世話の相手になるより、内職に精を出した方が得だったからである。

源五右衛門は茶を持ってきた女中が、食事はと聞いたが、済んだと答えた。彼は晩飯をまだとっていないが、喰ったら反吐しそうな気がしていたのである。

女中は台所部屋に引下った。

玄関に二筋の槍をかけてある。その二筋とも石井宇右衛門にとって無二の秘蔵である。一筋は柄の短い十文字槍だった。源五右衛門はその槍を選んで兇器につかう心算で、一たん茶の間を立ったが、屋敷内の人声に愕いて引返し、元の茶の間で慌てて胡坐を掻いた。

別な女中が茶を入れてきた。

「きょうは新参の仲間がみえないようだ、あいつはどうした」

「はい。ちと遠方へ飛脚にまいりました」

「そうか」

石井宇右衛門方には仲間が二人いる、一人は宇右衛門の供をして行ったという仁左衛門、一人は十五六歳の小僧で仙助という者、さつきから時どき声が聞えていたから、二人のうち屋敷にいる仲間は子供あがり一人だけだ、と、源五右衛門はひそかに胸勘定をした。

源五右衛門は悟られぬように要領深く、

「伝兵衛に話にこいといってくれ」

と、今度は二人いる若党の在否を確かめにかかった。女中は何ごころなく、

「伝兵衛殿はお長屋に引籠られました」

「例の手内職か」

「はい。手内職にかかりますと伝兵衛殿は、旦那様のお召にも、お尻が重くなり勝てござります」

伝兵衛に悪意はもたないまでも、好意をもたない云い方だ。

「伝兵衛め、欲の深い奴だからな」

女中は別に反対もしなかったが、頼母しからぬ男だとは思っているらしかった。

源五右衛門はにこ／＼笑って、

「佐左衛門がいるだろう、あいつに来いといってくれ、宇右衛門殿お帰りまで、ぼつねんともして居られぬ。例によつて浮世話を聞かすから来いといってくれ」

「佐左衛門殿は、旦那様ご用にて町方へお使いに参りました」

ここは郊外だから、大阪市中をさして「町」といった。

源五右衛門は肚のうちに、若党二人のことはこれで判った。

あとは宇右衛門の家族と乳母のことだが、それは聞かないでも判っている。

宇右衛門には四人の男子がある。総領は三之丞といって、城中の千貫矢倉の北にある、城代屋敷に常勤めで、こゝにはいなかった。次男彦七は病弱で、きょうも部屋に引籠り、臥床のなかで休んでいる。三男十三郎は六歳で、乳母に抱かれて早くから一間に睡っていた。四男亀之助は三歳で、大阪生れの母に抱かれ、町の親族の家へ逗留に行つて五六日になる。

これだけの事を、それとなく探つて知つている源五右衛門は、宇右衛門を討果すには今夜こそ屈竟だと、決心の仕直しを更めてした。

夜の五ツ過ぎ、五ツは今の午後八時である。騒音のすくないその頃ではあり、場所が郊外だけに、四辺は森として、町の真夜中よりも静かだった。六歳の三男十三郎がむずかるのを乳母があやして寝かしつけている。細々とした子守唄が、時に寂しさと愁いと呼んでいる。その他には、夜風が忘れた頃に、どつと吹いて去るだけである。

源五右衛門は硯箱を借り、
「お帰りが遅いから又あすにでも来る」
そう云つて筆を咬み紙をとつた。置き手紙を認めるらしかった。

女中が引下ると源五右衛門は筆をすて、眼を閉じて考えに耽つた。

暫く経つてから源五右衛門が台所へ出てきた。女中は二人とも、行燈の灯のそばで、やりかけの縫物を手にして居睡っていた。年少の仲間仙助は壁際でこくり／＼、大きく居睡っていた。源五右衛門はそれを見届け、

「宇右衛門殿お帰りになつたら、よろしく申上げてくれ」

と、一先ず外へ出た。

源五右衛門は間もなく足音忍ばせて引返し、台所の外に葭簀でつくった垣がある、その蔭にかくれ、聞き耳を、門の外と台所の内にと向けた。

門の外に何やら物音がしたので、宇右衛門が帰ったかと窺つた、と、それは猫だったのを啼声で知つた。

時が可成り経つてから仙助が台所から出てきて、門を閉じ門をかけた。お帰りが遅いから要領のため一先ず締りをしよう、そういう心算であることが察せられる。

又暫く時が経つた。源五右衛門は台所口からそつと忍びこみ玄関へ廻つて一筋の槍を盗んだ。盗んだのは十文字槍だった。

源五右衛門はその足で彦七の部屋の前に行き、入口の杉戸に支えの棒をかけた。彦七は時に十七歳、病弱ではあるが、変を知つて逃げる男と思えなかつたから、罐詰の方法をとつた。

源五右衛門がはいつて出るまで、茶の間に集つて、退屈そうに話をしていた女中と仙助とは、居眠り癖が全く去つていなかった故か、足音一つ聞きつけなかつた。

外へ出た源五右衛門は、葭簀垣の蔭に少刻のあいだ佇んで、又抜き足さし足で動き出した。今度は伝兵衛の寝起きしている長屋の前へ行つた。そこは物置に使つたこともあるので、壺金を出入口に打つてあり、錠前をさすことが出来るようになっていた。源五右衛門はそれを知つていて掛けた。勿論、音が短くしたが油断のある伝兵衛は、音を聞いたに拘わらず放つて置いた。

源五右衛門は葭簀垣の蔭に引返し、地に横たえて置いた十文字槍をとり、特物のうち何一つ取り落とさないように、更めて注意をはらい、宇右衛門の帰宅を今か／＼と待った。

そのうちに尿を催してきた。長らく外にいたので冷えたので

ある。尿を放つことは屋敷のものに覚られる惧れがあるので、休やすんでいるうちにいよ／＼催もよほおしてきた。それでも休やすえていたが遂に休やすえきれなくなった。

どっと又吹き去った夜風のあとで、足音が聞えた。確に二人である。一人は石井宇右衛門、一人は仲間の仁左衛門、それに違ちがいないと源五右衛門は覚った。尿のことは忘れた。

門が叩かれた。仁左衛門の音がする。

「お帰り——お帰り」

と／＼と門の扉が叩かれた。

「応おこつ」

声こゑ変り最中の仙助が返辞をして、門の門を外して台所から出た。

源五右衛門は息を殺して隠れている。門が外され、宇右衛門がはいってきた。仁左衛門の持っている提灯のあかりで、宇右衛門の姿が黒く見えた。

宇右衛門の底力のあるいつもの声が命じた。

「仙助、門の締しめをしろ」

「はい」

子供あがりの仲間は門の扉を閉じている。

供の仁左衛門は前立ちとなり、提灯のあかりで、主人の足許を照した。

宇右衛門は玄關へ行かず、台所口へむかった。待伏せが我が屋敷のうちにあらうとは、夢にも知らなかった。

台所の戸が一枚開いている。今、仙助が出て行った後である。内から鈍い灯が斜に外へ映さしているその圈内へ、宇右衛門がひと足入れたので、袴の裾が光って見えた。

と、それまで息を殺していた源五右衛門が、葭簀垣越しに、黙もくって十文字槍で宇右衛門を突いた。槍は横腹を刺した。

「何奴」

と、叫んで宇右衛門が刀を抜き、刺した槍を手繰たぐって曲者を斬ろうとした、が、十文字槍が横腹で鐙やどの役をして、手繰たぐって／＼槍が手繰たぐれなかった。

仲間の仁左衛門は持っていた提灯を、思わず取落とし、

「狼藉者！」

と、叫ぼうとしたが声が出なかった。息をついて腰の木刀を抜きとりながら、漸く叫ぶことが出来た。そのとき提灯が燃えて、あたり一带を照らした。

宇右衛門は顔を盛めて槍を手繰たぐろうとしている、その槍をぐいと振って放たれたので、撞ぶと地に倒れ、背中が燃えている提灯を押しつぶした。その途端に、燃え残りの提灯の胴が飛んで、別のところで事件を照した。

葭簀垣の内から刀が閃ひらめいて、垣が切りひらかれ、躍り出た源五右衛門が、起きあがろうとする宇右衛門に、

「おッ」

と、叫んで一太刀あびせた。

気を吞のまれている仁左衛門が、そのとき、

「狼藉者ウ」

援助を求めて声振り絞りながら、木太刀で源五右衛門を撲うった。

「うぬもか」

と源五右衛門が睨にらみ、強よかに斬りつけた。仁左衛門は横腹を深く斬られ、倒れはしたが、声を絞り、

「狼藉者ウ」

地に爪をたてて叫んだ。

茶の間では駐こんできた女中が二人、相抱いて戦あいて、髪にさしていた木櫛を二人とも、ふるい落したのに気が付かずにい

る。

長屋にいた伝兵衛は、戸を開けんと手をかけたが開かない、開けん／＼と、二三度、試みるうちに怖さが出て、狭い長屋のなかを、そつと歩いては停まり、停まっては歩いている。

三男十三郎に添寝をしていた乳母は、はつとして起きはしたが、部屋から出なかった。

二男の彦七は熱の疲れで、うと／＼浅い眠りに落ちていたが、物音と人声とで、がばつと起き刀を掴みざしにして、板戸を開けようとした。源五右衛門が施して行つた支え棒のため、板戸が開かないので、蹴破りにかゝつた。岩乗にできていた板戸はなか／＼破れなかった。漸く蹴破つて台所の外へ駆付けたが、遅かつた。宇右衛門の息が絶えていた。

「仁左、そちも傷を負つたか」

「彦七様、曲者めは」

「おう、何奴だ」

「赤堀源五右衛門」

彦七は殆ど信じかねた。父宇右衛門に何彼と世話になり、奉公口にあり付くことも父宇右衛門ばかり頼みにしている源五右衛門が、恩を仇で返したとは合点がゆきかねた。

「仁左、確に源五右衛門か、そち、顔を確に見たか」

「見ました。お提灯が燃えました。あかりに照らされました赤堀源五右衛門の形相、この眼で確に見ました」

「ようし。仁左、心を丈夫に持て、傷は浅いぞ。伝兵衛々々。

仙助々々」

呼ばわつたが答えがなかった。

彦七は一人で門へ飛んで行つた。門には今し方、仙助が門をかけたばかりである。門がかかっているのでは、敵源五右衛門がまだ屋敷のどこかに潜んでいるに違いなかった。

彦七は抜刀して屋敷内で、およそ人が隠れていそうな所を、馳せめぐつて探した。何処にも源五右衛門はいなかった。

長屋の一つで何やら音がする。さては、そこに隠れているかと、戸を開けんとすると内から、

「どなた様／＼」

と、伝兵衛の狼狽した声がした。

壺金が掛っているのに気がついて、彦七が外してやると伝兵衛が軀が如く出た、さすが刀だけは手にしていた。

不思議なのは仙助である。事件の始まる前、門に門をかけた、それ以来、姿が消えている。

仁左衛門が何度も、「狼藉者」と呼ばわつたその声を聞きつけて、近所の屋敷の主人、伴が、追取り刀、槍掻いこみ、駆付け／＼、門の前に集まつたが、門が締まっているので扉が開かずくぐりも内から二カ所、栓を卸してあるのでこれも開かなかった。

「石井氏、何事かおありのご様子。お手伝い申す、開門あれ、開門あれ」

二三の聲が呼ばわっているうちに、屋敷々々の若党仲間が、提灯をもって駆付けたので、門の前は昼のごとく明るくなつた。

門内では彦七が、源五右衛門を発見できず、憤怒に色青さめ、

「伝兵衛、来い」

門に馳せつけ、扉を開いて、外の人々にむかい、

「忝く存じます。父宇右衛門、横死を遂げました」

「して／＼、曲者は」

と、駆付けつた人の中で、禄と役と年の上のものが聞いた。「屋敷内にいまだ罷りあるかと存じます」

「心得た」

と、その人は門の固めを、早速、駆付けたものの中から定め、搜索隊を二タ手つくり、宇右衛門の死体始末、仁左衛門の手当のものを定め、それ／＼すぐに活動をひらいた。

仁左衛門の傷は重いので必死であると、だれにも判ったので、駆付けたものの中から、二三人が更めて、曲者が赤堀源五右衛門であることを確に見届けました」という言葉を聞きとった。

屋敷内を搜索した二タ手は、やがて空しく落合った。そこは門の内側で、台所口へ行く突つきである。

と、隣家の丹羽平左衛門の総領が何か聞きつけたか、門の内側に置かれてある腰掛の下を覗み槍を構えて、

「彦七殿々々」

と、呼んだ。近くにいた人々も、腰掛の下が怪しいと気がつき、ぐるりと包囲した。

彦七が飛んできた。見れば鬢の乱れ毛が汗でベツとり顔に貼りついている。病身で瘦せているし、こういう場合には別して、正視できないほど痛々しかった。

「彦七殿がみえられた」

送られて彦七は、人垣の一番前へ出た。

「おう彦七殿。この腰掛の下に何者かおります」

さては源五右衛門、こんな処に潜んでいたのかと、彦七は鞘に納めてあった刀を抜きかけ、ふと兄のことを思いついた。もし、源五右衛門だったら、自分ひとりで手にかけては弟の義が立たない、敵は兄弟二人で討果すべきである。

「いずれも方。敵源五右衛門を生捕りにいたしたくご座ります」

彦七の心はだれにも通じた。さらば、生捕りと、包囲の人々

が備えを更めかけると、腰掛の下でわッと泣く声があった。

源五右衛門め、泣き出したぞと、包囲の人々も彦七も、一時はあッと思つた。

「それッ、腰掛おそを除かれよ」

指揮する者があつたので、二三人、駆け寄りざま、腰掛けをさッと除く、素早く入れ代つて四五人、引ッ組もう叩き伏せんと、仕掛けかかる下で、横坐りになって泣いているのは、子供上りの仲間仙助だった。

案に相違して人々が、手を引いた。彦七が、

「仙助、その方、始めからそこに隠れていたか」

「はい／＼」

返辞より泣き声の方が遙かに多かった。彦七は焦慮あせわつて、

「源五右衛門は何んとした。知っているか仙助」

「はい、存じて居ります」

泣声より言葉が漸くのことでも多くなった。

「源五右衛門はいずれに居る」

と、彦七が武者ぶるいして詰め寄つた。仙助は隣家のものの提灯に照らされ、怖々ながら、

「源五右衛門様はお帰りになりました」

敵に「様」をつけ、「お帰り」という仙助を、殴りかけたが彦七は、

「どこから逃げ去つた」

「はい、御門からでござります」

「門をだれが開けた」

「源五右衛門様がお開けになりました」

「そのあとで、だれが門を閉めた」

「わたくしでござります」

「何んとて閉めた」

「源五右衛門様が、又おいでになると恐ろしくうござ座いますから、わたくし、閉めました」

それで見込み違いをしたのだ。敵にとって勿怪の幸いの見込み違い、源五右衛門め、やす／＼その為に逃亡できたのだらう。

隣家の人々は、

「とに角、追つてみよう」

と一手は南の方の堀の外れ辻町方面へ、一手は西の安堂寺橋方面へ、一手は東の平野川方面へ、もう一手は北の屋敷街から谷町筋かけて、一斉に追手が出た。時が経っているのを見込みは薄かった。果して、追手はすべて空しく引返した。

その一方、仲間仁左衛門の治療のため、藩の外科医が駆け付けたが、その前に息が絶えた。

彦七は町の親類へ行き逗留している義理の母よりも、城中にいる兄三之丞に、早く、この事件を知らせたいと焦慮した。幸い駆け付けてくれた中に、三之丞の親友がいたので、その人に頼んだ。

その人は夜中、城内へ出入りが厳禁されているので、早速の智恵で、事情のあらましを書状に認め、自分でそれを持ち、駆け足で追手門へむかった。若党が一人、提灯をもつて続いた。無燈ではこんな時は間違いがおこり易いからである。

横死を遂げた石井宇右衛門の主人は、大阪城代青山因幡守宗俊で、信州小諸三万石を領していたが、寛文二年三月、二万石の加封で五万石となり、大阪城代に家中を率いて赴任して以来、この時まで十二ヵ年経っている。時に六十九歳。

追手門に駆けつけた三之丞の親友は、夜空を背景に聳え立った真黒い大阪城の正面に、つかつか向かった。

【註記】青山因幡守宗俊の父を因幡守忠俊といい、酒井

雅楽頭忠世、土井大炊頭利勝と三人三代將軍家光の傅となり、頗る忠義であつた。家光の將軍たりし寛永中、武州岩槻二万石を没収され遠州に配流となる。家光後悔して召せど応ぜず、配所で卒した。子の宗俊も父とおなじく配所にあつたが、召されて三千石を賜わつた。そのころ堀田加賀守正盛、老中にて勢威大に振つていたが、宗俊の始めて登城するや、昔、親しかりし人々あつまり、喜びを述べている処へ立寄り、「誰なりや」と問うた。「青山因幡守なり」と答うるや、堀田が、「伯州の子か」といった。宗俊の父忠俊は伯耆守といひ後に因幡守といった。堀田は後の因幡をいわず、前の伯耆をいだったのである。剛直なる宗俊は「こは誰人なりや」と問ひ、人々が「加賀守殿なり」というや、

「さては勘左衛門殿御息か」と応酬した。加賀守の父は勘左衛門正俊といつたからである。別の説では松平伊豆守信綱が「伯耆の子か」といつたのに応酬し「卿は大河内の子か」とやつた。伊豆守信綱は長沢松平家の養子で、実父は大河内金兵衛久綱だったからである。慶安元年信州小諸三万石を賜ひ、在城十五年間、専ら農耕の振興開発にあたり多くの治績をのこした。宗俊の配所にあるや自ら田を耕やし労苦をよく知つていた。始めて配所より召さるるや応ぜず、已を得ずして登城するや、笠を頂いて至る、咎むる者あれば答えて、「我は罪人なり、天目を仰ぐべからず」と。その日、綿服を着けて行き、三千石を賜わつてから服を更めた。宗俊の大阪に城代たりしは寛文二年三月十九日より延宝六年六月十七日まで、十九ヵ年の久しきに亘り、治績頗る多い。

追手門の前に一ツ辻番所がある。斜め南の方に遠く又一ツある。その正反対の京橋寄りにも一ツある。三ヵ所、三点、その

他に灯の色はどこにもない。

三之丞の親友は、この辺のことなら悉く知っているので、追手番に一言の断わりをいって、右四十一間、左四十五間二尺の追手土橋をわたり切ると、右に番所があつて、昼夜交替、絶えず番卒が詰めている、それに断わりをいって、門の扉のじぶくの下へ書状を差入れ、引返した。

この書状は門内の番卒がすぐ拾いあげた。

追手門内の樹形は二十一間余と十五間余ある、正面左りに渡矢倉構え、総筋鉄張りの大戸がある。そこで書状が再び扉の下から差入れられ、番所のものの手に渡り、番士がそれを持って千貫矢倉の下を通り、城代屋敷に赴き、不寝の者に手渡した。城代屋敷は東向きで玄関は唐破風造り、地坪二千六百十坪、堂々たるものである。

書状はすぐ三之丞の手にはいった。驚愕したことはいうまでもないが、夜分の外出は許されない、しかし、父の横死であることから、破格というので、家老蜂須賀新左衛門その他が、すぐさま協議して、既に臥床にはいっていた城代に事情を報告し、裁許を乞うた。

青山因幡守は世の人情をよく知っていた。年も七十に近いので、親子の情合いに思いやりが深かった。で、早速、出して遣わせと命じた。これは破格のなかの破格の慈悲だった。

三之丞は若党庄太夫、仲間孫助が早くも仕度してしてくれたので、僅かの時間の後、追手門から長い土橋をわたった。

「途中、幸いにして敵に出会わば、その場に於て勝負する、めいめいその覚悟せい」

若党仲間も勇み立ち、道々、充分心をつけたが、怪しと思うものに会わなかった。

屋敷へ駆けつけた三之丞は、兄の顔をみて弱い体の彦七が坐

にも耐えがたく疲れが出ているのをみて叱りつけた。

「彦七、女々しいぞ」

「はい」

「心を張れ。愁嘆している時ではない」

三之丞だとして、弟を憫れまないのではないが、安心させては病が重る、無理と知りつつ叱らなくてはならなかった。

町から三之丞彦七兄弟の義理の母が、幼い末弟の亀之助を抱いて帰ってきた。

隣家で宇右衛門が特に懇意だった、おなじ家中の丹羽平左衛門は、事件が起ってからずつと詰めていて、何くれとなく世話をやいてくれた。同家中での宇右衛門の親友駒沢加右衛門が、駆け付け大阪の町人で資力のある厚東左助といつて宇右衛門の後妻の妹嫁、これも駆け付け、夜明け近くなつてからは三之丞の朋輩で、親友の一人、坪井小左衛門その他も駆け付けて、宇右衛門の甥で玉造口の城番、安部丹波守（信之、三州榛原二万二千石）の家士の丹羽孫之進も駆け付けた。

三之丞は「永の御暇下される様に」と願書を書いて人々にその斡旋を頼み、その一方で彦七を励まし、父の死体を伏し拜み、

「只今より敵源五右衛門を探し討果して怨みを報じ、父上のご無念を慰め申上げます。願くば父上、われら兩人の導きをなし給い、怨敵に邂逅わさせ給え」

泣き／＼頼んだ。彦七も泣いた。

三之丞兄弟は武運を祈ってくれる人々に送られ、若党田曾谷庄太夫、仲間孫助という、三之丞付の家来二人をつれ、先ず天満の貸問寺近くへ行き、孫助を様子探ぐりにやった。源五右衛門はきのうの午後、いつもの如く出たまま、ゆうべ遂に帰ってこなかったという。その他には心当りとしてないが、人出の多い

処を血眼になって探し歩いたが、遂に形跡さえ判りかねた。
三之丞は遠く伏見辺まで探がし／＼歩いた。

詭計

石井宇右衛門の死体は、谷町筋の寺町、地藏尊の南にある大仙寺というへ葬った、年六十一。法号を性海以得居士と下され、又主人と共に死んだ仲間の仁左衛門も、同じ寺に葬られた、法号は魏天宗本とくだされた。

三之丞の永の暇の願いは、すぐさま聴許されたので、屋敷明渡しをしなくてはならない、その方は駒沢加右衛門、丹羽平左衛門、坪井小左衛門、その他の人々が進んで引受けてやってくれた。これは三之丞と彦七とに、専心、復讐にからせようという厚意に他ならなかった。

三之丞、彦七はすぐにも発足して、江州へ行きたかった。江州大津には源五右衛門の養父で赤堀遊閑という者が、針医を開業して立派なぐらしを立てていた。

が、江州入りの前に、一家の嫡子として三之丞は、始末を計らねばならない事があった、それは義理の母と幼い弟の十三郎、亀之助、二人のことである、若党の伝兵衛や仲間の仙助その他のことは、処置はどうにでも直ぐつくが、母と弟二人のことは、最も良い引取人を考えなくてはならなかった。

玉造口番の安部丹波守家中の丹羽孫之進が、六歳の十三郎を一時引きとり、先々の養育を芸州広島島の浅野家にある親類に頼むことにした。広島へ行けば叔父も居り従兄もいる。

三歳の亀之助は、母が手放すことを悲むので、大阪の町家で

資力のある、母の親族へ預けることにした。

召使は暇を出した、その中で一人、若党の伝兵衛だけは、広島へ追返し／＼、手紙を持たせて発させた。伝兵衛は主人の大事に長屋の中に引込んでいたのが、頗る不評判で、たとえ、大阪に残って武家へ奉公を求めても、何処でも相手にしないとは判っていた、伝兵衛もそれを知っているので、喜んで、広島へ発足したのである。広島なら不評判はなからうと思っ

た。
さて、伝兵衛が広島について、実兄小倉忠右衛門が若党奉公をしている、石井清太夫といつて宇右衛門には甥になる、浅野家中の士の長屋に草鞋をぬぎ、兄の忠右衛門に大阪での出来事を語りかけると、兄が驚いて、

「やれ、待て。お前、それでは飛脚にきたのだろう」

「まあそうです、けれ共、お暇が出まして、何処へなり奉公勝手と、三之丞様が仰せでした」

「と、書状を持って行けと仰せなかったか」

「いやア、それはありました。手紙をこんなに託かって来ております」

「この馬鹿ものめ、兄のいる処へ先へきて、草鞋の紐を解く奴があるか、憚れ返った奴だ。お暇は出ても旦那様の一大事、お知らせの手紙を後にして、兄に永々と語ろうとする、不埒とも、不心得とも申しようのない奴だ。早々にお届け申上げろ」

「そう怒らないで下さいよ、何も悪気があって後廻しにした訳ではないのですから」

「お前は気が利かないのでなく、誠実というものが無いのだ、人間に一番大切なものがお前には欠けている。そのお手紙の半ばを寄越せ、おれが代ってお届け申し上げる。こういう時は片